長野市の埋蔵文化財第23集

横田遺跡群　富士宮遺跡

――鉄塔移設に伴う緊急発掘調査報告書――

1987. 9.

長野市教育委員会
中部電力株式会社長野支店

序

長野盆地を形成した信濃川の二大支流、千曲川と犀川は、古代から現在まで私達の生活・文化に大きく関与し、そして育んできました。特に古代社会に於ては、より直接的なかかわりを有していたものと想像されます。

その中でも食生活における恩恵は大きかったものと思われます。飲料水の確保はもとより、秋に遡って来る鮭や鱒が捕獲されて冬場の食膳を賑わすばかりでなく、一年を通じ生息している川魚は大切なタンパク源となったでありましょう。

更に生命を危機に落し入れる洪水がたびたびあったとしても、新たな土砂は肥沃な地を一層潤し、農耕民達を喜ばせたでありましょう。もとより現在に受け継がれる水田の中には、これらの河川が形成した湿地を利用しているものも少なくないようで、集落を構成する自然堤防・扇状地形上の微高地もこれらがもたらしたものと考えられます。

今回調査された場所は、千曲川を直前に望む地であり、古代人がその場でどのような営みをしていたかをさぐる絶好の機会でありました。ただ残念だったのは、調査地が狭かったことと、集落の中心からずれていたため、ほんのさぐりを入れる程度に終ってしまったことです。しかし横田遺跡群に於て初めて学術的調査がなされ、先人の生活跡が垣間みられたことは、評価にあたいするものと自負しています。

ここに長野市埋蔵文化財第23集を刊行するにあたり、この地の歴史的解明に役立てていただければ、この上ない喜びとするものです。そして先人の残した文化遺産の中から、生活の知恵を学び、将来に生かしたいものと考え、そのためには、皆様と共にこれらを守り、継承していかねばならない責任を感じます。

末筆ながら、調査にご協力いただいた中部電力株式会社長野支店・西横田区・長野市高齢者事業団の皆さんに感謝申し上げます。

昭和62年9月

長野市教育委員会教育長　奥村秀雄

例　　言

1．本書は、中部電力株式会社長野支店による鉄塔移設事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

2．調査・整理及び報告書の作製等の業務は、長野市埋蔵文化財センターが行った。

3．遺構実測図中断面図の水平基準線は、標高344.74mにあたる。方位は磁北を指す。

4．調査日誌・遺構実測図の一部に遺構略号を用いた。ＳＢは住居址、ＳＥは井戸址、ＳＫは土坑の表現である。

5．調査にかかわる資料は、長野市立博物館で保管している。

目　　次

序

例言・目次・図版目次

第１章　調査の経過 …… 1

第１節　本調査に至る経過 …… 1

第２節　調査日誌 …… 1

第３節　調査の体制 …… 2

第２章　遺跡周辺の環境

第１節　地理的環境 …… 4

第２節　考古学的環境 …… 6

第３章　調　　査

第１節　土層序 …… 8

第２節　遺構と遺物 …… 8

１．弥生時代の遺構と遺物 …… 8

２．古墳時代の遺構と遺物 …… 8

３．平安時代の遺構と遺物 …… 13

４．平安時代以降の遺構と遺物 …… 21

第４章　まとめ …… 25

図版目次

図版１　調査地遠景

図版２　調査地近景・遺構分布状態

図版３　１号住居址・５号井戸址・１号井戸址

図版４　２号住居址・３号井戸址

図版５　２～５住居址・１号土城・４号井戸址

図版６　３号井戸址・１号井戸址

図版７　調査スナップ

図版８　調査スナップ

第1章　調査の経過

第1節　本調査に至る経過

昭和62年3月7日付で中部電力株式会社長野支店用地部より長野市篠ノ井西横田富士宮地籍における「鉄塔移設に伴う埋蔵文化財包蔵地の現地調査」の依頼があり、位置等を検討した結果、「横田遺跡群」内に移設されることが判明した。この検討をもとに長野市教育委員会では依頼先へ「当該移設地は横田遺跡群の範囲内に存在し、遺跡・遺構等が存在することが想定されるため、事前協議の結果にもとづき発掘調査の必要性が認められる」と回答した。その後両者の協議が続いたが、新年度から新たに長野市埋蔵文化財センターの設置が予定されていたため調査開始を4月とした。

さて新年度を迎え新機構としての埋蔵文化財センターが設置され、新しい組織のもとで4月10日に中部電力株式会社長野支店用地部と長野市埋蔵文化財センターの職員立会いの下、遺跡の規模・性格を把握するため試掘調査を行った。一区画を表土下約80cm掘削したところ平安時代の住居址と思われる落ち込みが確認されたため、掘削を一時中断し、本調査を実施することにした。

本調査は「埋蔵文化財に関する協定書」に基づき、鉄塔移設地のうち実質的に破壊を受ける鉄塔基礎内約225㎡を全面発掘をするもので、鉄塔移設の工期をかんがみて、4月14日より6日間の日程で実施することにした。

試掘から本調査まで、4日という急転回でとまどう所も多々生じたが、中部電力株式会社長野支店の重機提供、西横田区及び高齢者事業団の援助を受け何とか本調査にかかることができた。

第2節　調査日誌

4月11日　バックホーにて遺構面までの表土除去作業を行う。西横田区へ作業員の協力を要請する。

4月12日　表土除去作業完了。高齢者事業団へ作業員派遣を要請する。

4月13日　調査器材を整理・搬入する。

4月14日　本調査開始。長野市埋蔵文化財センター所長より調査方針・方法の説明がありテント設営後残土処理から調査を開始する。住居址4～5軒ある模様。遺物は平安時代のものが多い。

4月15日　桃の花が満開になる。遺構検出作業を本日にて終了する。住居址（ＳＢ）５軒・住居址と思われる落ち込み２ケ所（ＳＢ５・６と呼称）・井戸址（ＳＥ）２基・土坑（ＳＫ）７基・柱穴（Ｐ１・2）等を確認した。

4月16日　本日より遺構の発掘作業を開始、ＳＥ１・Ｐ１・Ｐ２・ＳＢ５（？）・ＳＢ６（？）・ＳＫ１・ＳＢ２から順次開始する。ＳＢ５・６は、本日のところ住居址であるか否かは依然不明である。午後、4m区画による実測用の基準点及びレベルポイントを設定する。

4月17日　ＳＢ１・２は、本日で完掘する。ＳＢ５・６は、性格不明のため後日再調査することにした。またＳＥ１・ＳＫ１もかなり深いため調査を一時断念する。ＳＢ７の調査を開始する。

4月18日　ＳＢ１・２の写真撮影したあと実測作業にとりかかる。ＳＢ３・４の調査を開始する。ＳＢ２の実測終了後、掘り方面まで検出しＳＢ４の形態を確認する。ＳＢ７は、ＳＫ７により大部分が切り込まれている。ＳＫ５は本日で終了する。ＳＢ５の調査を進めるも不規則な落ち込みで、後の耕作によるものと判断し調査を打ち切る。ＳＢ６は、土坑や撹乱による黒色土の落ち込みと確認され、これも調査を打ち切る。ただＳＢ６内からＳＫ６・８を確認した。ＳＢ３より鉄製鎌・土錘が各１点出土した。

4月19日　各遺構の発掘調査は本日にて完掘する。写真撮影終了後、実測作業にかかる。調査器材の整理・撤収をする。

4月20日　昨日残した遺構の実測及び補足実測をし、現地における調査を完了する。

追記　整理検討の結果、ＳＢ５・６は住居址ではなく後世の撹乱と断定する。またＳＫ１・２・７は井戸址と認定した。そのため、以後の遺構番号は次により変更する。ＳＢ７→ＳＢ５、ＳＫ１→ＳＥ３、ＳＫ７→ＳＥ４、ＳＫ２→ＳＥ５。

第３節　調査の体制

調査は、昭和62年４月１日の機構改革により、新課として「長野市埋蔵文化財センター」が設置され、埋蔵文化財の調査を専門に担当することとなった。埋蔵文化財センターの機構図を関係する機関を含めて略記すると以下のとおりである。

【教育委員会事務局】

教育長（奥村秀雄）――教育次長（丸山義仁）（青木喜保）――社会教育課――※
- 社会教育係
- 公民館係
- **文化財係**

※ 長野市立博物館
- 庶務係
- 学芸係
- 長野市埋蔵文化財センター（所長　小木曽敏）
  - 庶務係（所長補佐兼庶務係長　小山　正）
    - （事務員　倉田佳世子）
  - 調査係（係　長　矢口忠良）
    - （主　事　青木和明・千野　浩）
    - （調査員　中殿章子・横山かよ子）

【調査の体制】

調査主体者　長野市教育委員会教育長　奥村秀雄

調査担当者　矢口忠良

調　査　員　青木和明・千野浩（現地担当）・中殿章子・横山かよ子

調査補助員　柳沢和久・斉藤孝之（以上愛知学院大学生）、原正樹（東京経済大学生）、清水隆寿（立正大学生）

調査作業員　唐木和子・唐木けさい・唐木義人・唐木幸子・柳沢まち子・（以上篠ノ井西横田区）山田豊司・小池秀之・田中正敏・竹内朋芳・町田速夫・丸山安男・水野茂利・村田邦夫・小池政芳・中牧己善子・篠沢きよ（以上長野市高令者事業団）

整理作業員　徳成奈於子・岡沢治子（以上小島田町）

調査協力等　表土除去・埋戻し作業（中部電力株式会社長野支店）

第２章　遺跡周辺の環境

第１節　地理的環境

佐久・小県地方の山間地を縦貫流してきた千曲川は、更埴地域に入ると長野盆地南縁で流路を広めて蛇行を始める。調査地より上流の戸倉町・更埴市・長野市塩崎では、そのため東西の山麓部には河岸段丘が認められたり、山間地内には幾筋かの旧河川路が確認できる。しかし、長野市塩崎上篠ノ井の軋良根子（からねこ）神社付近から北流してきた千曲川は、直角に近い角度をもって東流し、東側山地をかすめるように蛇行するようになる。その著しい例が山麓突出部の先端が侵食を受け丸味を帯びていることである。これは中部山地を横貫流して来た犀川の侵食作用を受けた土砂が堆積し、川中島扇状地を形成し、更にその上を犀川が流路を変えながら扇状地を拡張していたことが最大の要因である。この扇状地の南端は篠ノ井遺跡群の一部、横田遺跡群の背後まで及んでおり、自然堤防背後の区画線を消している。

特に長野盆地南縁部においては、新旧千曲川の流路の変更と蛇行により、顕著な自然堤防と後背湿地を両岸に形成した。もとよりこれには、扇状地を作り出すような河川がなく、それによる影響が少なかった点も要因になっている。千曲川左岸の自然堤防は、一部更埴市八幡地籍から始まるようであるが、長野市篠ノ井塩崎松節地籍から認められ、下流の同東横田まで延長約５.５km に及んでいる。それ以降の下流域は、旧河川跡が見られるものの川中島扇状地の末端にあたるため認められなくなる。また後背湿地は、塩崎・石川・二ッ柳地籍の現水田面をあてることができる。しかし、横田地籍においてはやはり川中島扇状地の張り出しにより現地形からは確認できない。一方千曲川右岸の自然堤防が明瞭になるのは、更埴市粟佐から雨宮地籍にかけてであるが、左岸程明確ではない。更に唐崎山と薬師山間の湾入低地に見られ、妻女山から象山にかけての大きな湾入低地の長野市松代町清野地籍にも長さ約1.4kmにわたって確認される。これ以下松原・大室・若穂地区でも見られ、前者同様東部山地から突出した山麓にはばまれて連続したものではない。また後背湿地もあまり発達していない。

今回調査した横田地区は、前記したように千曲川の左岸にあり、自然堤防確認地の最も下流にある。標高は約355～354ｍの範囲にあり比較的平坦であるが、調査地のすぐ南側の農道を境に１ｍ近くの段差がある。即ち、現在の堤防近くの355ｍの等高線から堤防内農道にそって自然堤防の側線とすることができる。尚、自然堤防の巾は遺跡の分布範囲と考え約500ｍを想定し、長さは1.2kmである。地目は他の自然堤防と同様の宅地・畑地・果樹園等になっている。

図1. 遺跡周辺の主要遺跡分布図

1. 横田遺跡群　2. 篠ノ井遺跡群　3. 塩崎遺跡群　4. 粟佐遺跡群　5. 屋代遺跡群　6. 土口遺跡群　7. 四ツ屋遺跡群
8. 土口将軍塚古墳　9. 川柳将軍塚古墳　10. 姫塚古墳　11. 中郷神社前方後円墳　12. 屋代寺廃寺跡　13. 道島廃寺跡
14. 上石川廃寺跡

第2節　考古学的環境

前節で記した一連の自然堤防上からは、弥生時代～平安時代・中世にかけての遺物が採集され長野盆地の中で最も広範囲な、遺構密度の高い遺跡群として把握されている。その中から代表的なものを記載する。銅鉾及び同石製模造品が出土した松節遺跡、弥生時代中期の住居址及び木棺墓の検出で注目された市道松節・上町線遺跡、弥生時代中期の遺物が集中的に採集され学史に残る伊勢宮遺跡、古墳～平安時代の重複住居群が発見された塩崎小学校遺跡等を内包する塩崎遺跡群が上流域にある。中程に方形周溝墓群等が確認されている篠ノ井遺跡群があり、横田遺跡群へと続く。対岸の粟佐遺跡群の埋葬馬が出土した五輪堂遺跡は有名である。下流域は、鉄釜の出土した馬口遺跡、古墳時代土器編年の基準遺跡である城ノ内遺跡等を含む屋代遺跡群があり、長野市に入って、弥生時代後期の集落址や埴輪を伴う祭祀址（古墳）が検出された四ツ屋遺跡群がある。以上の遺跡群は居住址及びそれに関与する生活の場であるのに対し、主生産面をそれぞれ後背湿地帯に求める。左岸では数枚の水田層が確認されている石川条里的遺構（石川田圃）があり、右岸では更埴条里的遺構（屋代田圃）がある。これらにおける初源の水田は今のところ不明であるが、ともに10世紀前後の水田畦畔が確認されている。また、古墳時代の代表的記念物である前方後円墳をはじめとする古墳群は、この更埴地域に密集している。石川田圃及び塩崎・篠ノ井遺跡群を背景に築造された盟主的な古墳に川柳将軍塚古墳・姫塚古墳・越将軍塚古墳・中郷神社前方後円墳等がある。屋代田圃及び粟佐・屋代遺跡群が関与している森将軍塚古墳・倉科将軍塚古墳・有明山将軍塚古墳の前方後円墳がある。これらの年代は4世紀後半から5世紀代のものと考えられている。平安時代頃既に建立されたと推定されている寺院跡が長野市篠ノ井石川に、更埴市雨宮に、そして長野市松代町清野というように一つの単位空間の中に存在している点この地域の古代史を考える上に重要な要素となっている。

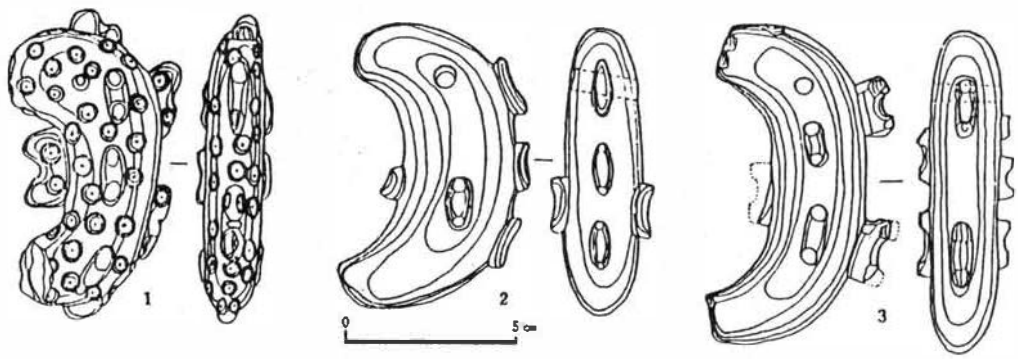


図2　観音寺遺跡出土子持勾玉（『更級埴科郡誌』より）

さて横田遺跡群を瞥見してみよう。この地における学術的調査は今回が初めてであることは前にも記した。ただこの遺跡群を著名なものにしているのは観音寺遺跡出土の3個の子持勾玉である。この勾玉の出土地等は、『中部考古学会彙報第四年第一報』（昭和14年）所収の宮本邦基氏報告文「信濃国篠ノ井町発見の子持勾玉」を一部略し、これを転載する。

「（前文略）去る7月上旬、望月一二三君より、子持勾玉らしきもの出土せしにより調査せよとの報ありしが、近来頗る多忙、1日1日と延べ居れるに、7月28日、小生の留守に態々学校に持参せられし故、越えて数日、同君の案内により親しく其場所を踏査せり。

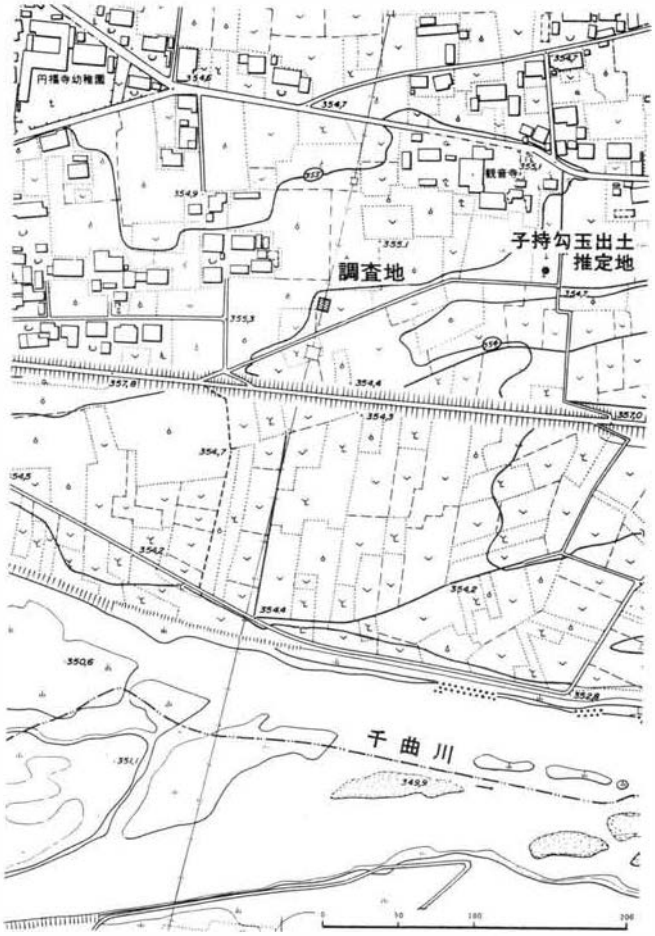


図3　調査地周辺の地形図

子持勾玉は文学博士高橋健自氏の発見地名表によれば、日本内地に於て出土地37個所にして、下総国7、信濃国6、常陸国5、大和国4ヶ所を主なる地方とし、1村2個を出土せるは、下総国猿島郡弓馬田村、信濃国諏訪郡永明村、因幡国気高郡松保村とす。然るに我篠ノ井町下横田区よりは3個を出土せり。

其中第一号は出土年代及場所は正確ならざるも、故老の伝うる所により、下横田区なることは正確なり。第2号、第3号は本年7月2日、観音寺新墓地平尾氏の境内にして地表より3尺5寸の所に存在せり。（以下略）」

またこのほかの遺物はというと、弥生時代～平安時代・中世の遺物が表面採集されているので他の遺跡群と内容・性格はほぼ同一であろうと考えられる。しかし他群程生産地が明らかになっていない。対岸の薬師山頂にある土口将軍塚古墳との関係を積極的に求めるならばやはり後背の川中島扇状地末端の篠ノ井御幣川周辺地を想定するのが妥当であろう。ともかく最も問題を残している遺跡群といえよう。

第3章　調　　査

第1節　土層序

遺構検出面は、黄褐色の粘質度の強い砂質土層で、地表面から約70cmを測る。井戸址の調査所見からこの土層以下は見た目には変化なく基盤層と考えられる。表土から50cm程は、耕作土で、それ以下黄茶褐色砂質土が60cm程堆積しており、間層は認められない。基盤層上部は、漸移層と考えられる暗黄褐色砂質土が10cm程の厚さでおおっている。4号井戸址（図12）の土層図で見られるとおり、遺構掘り込みの確認はこの暗黄褐色砂質土層からで、その上部の黄茶褐色砂質土層から明確に識別することはできなかった。尚、住居址・土坑等の確認面での覆土は黒褐色砂質土で、井戸址においては暗褐色砂質土を基本層としている。

第2節　遺構と遺物

遺跡群上には、弥生時代後期から平安時代・中世のものと推定される遺物が散布し、採集され、当然これらの時期の遺構が重複して検出されるものと予想していた。しかし調査の結果は、古墳時代の1号住居址及び3号土坑を除き他は、平安時代以降の住居址・井戸址・土坑・柱穴である。その分布も調査地東側にかたよっている。

1．弥生時代の遺構と遺物

該期の遺構は存在しなかったが、遺物の散状から調査地西側に展開するものと思われる。遺物は、調査地南西部の撹乱地及び包含層より弥生時代後期箱清水式期の甕・壺（高坏）の小破片が少量出土しているにすぎない。

2．古墳時代の遺構と遺物

1号住居址

遺構（図5）　調査地南、千曲川に面する自然堤防の南端付近に位置する。東隅を5号井戸址により一部破壊を受けているものの全体を検出できた唯一の住居址である。主軸方向はN 53°W を指す隅丸方形を呈し、その規模は主軸3.35m・東西軸3.65mを測る小形の住居址である。検出

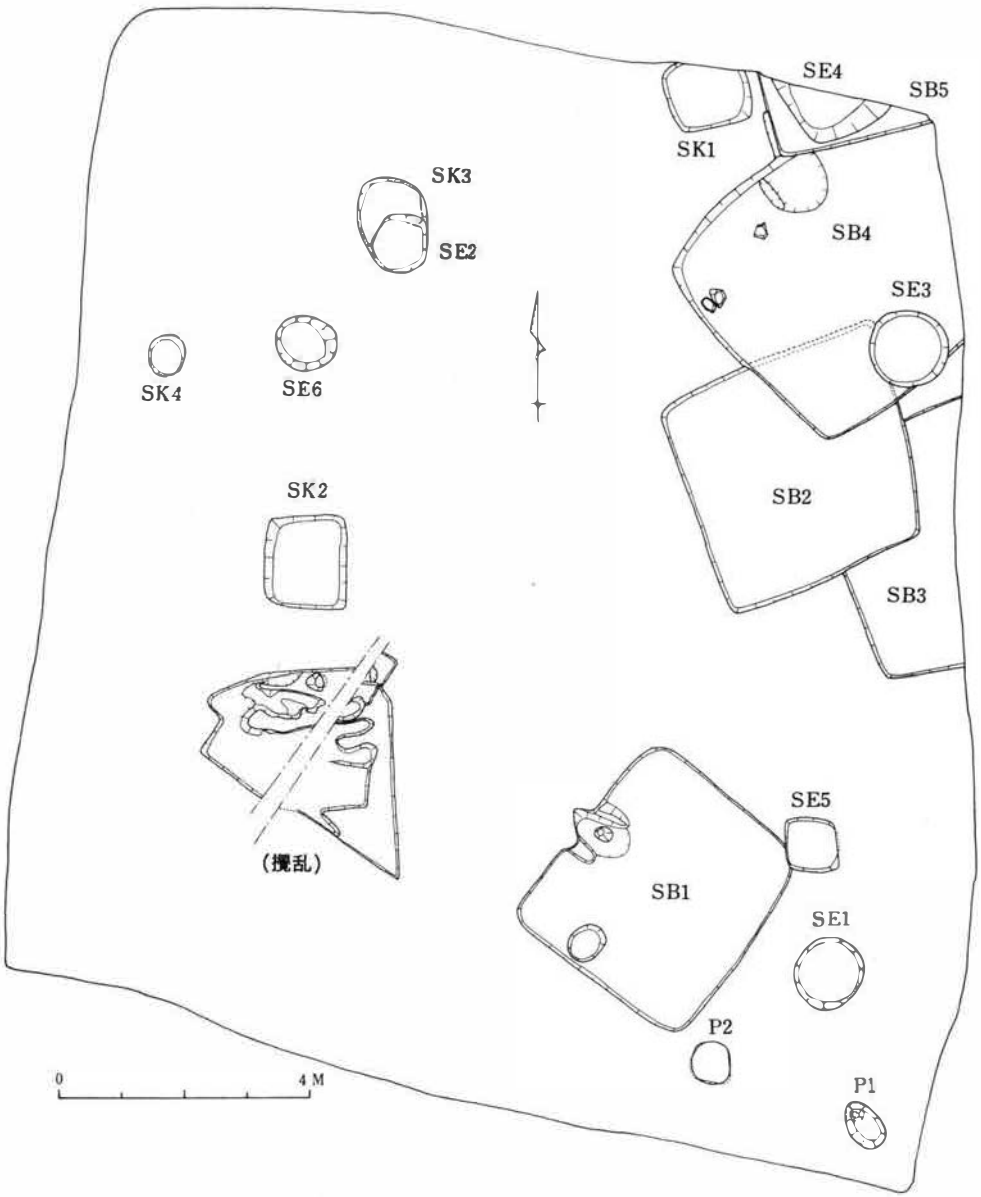

SE4
SB5
SK1
SK3
SE2
SB4
SE3
SK4
SE6
SK2
SB2
SB3
(攪乱)
SE5
SB1
SE1
P2
P1
0
4 M

図4　遺跡分布図

面からの掘り込みの深さは、北壁15cm・南壁13cm・東壁18cm・西壁7cmになる。カマドは北壁中央に構築され、造り出し両袖形態になるが、両袖とも破壊を受け痕跡だけを残す。両袖焚口部の内法は52cmを測る。内部は2～3cmの厚さで焼きしめられて焼土塊状を呈する。また火床中央付近に径26cm、深さ15cm程のピットが見られ、支脚抜き取りの痕跡かと考えられる。床面はいく分南壁にむかって傾斜を有するが、概して平坦でかたくつきかためられている。西壁際の不整長円形を呈する土壙状遺構は後世のもので、ピット1・2と関連するものであろう。柱穴等他の施設は認められなかった。

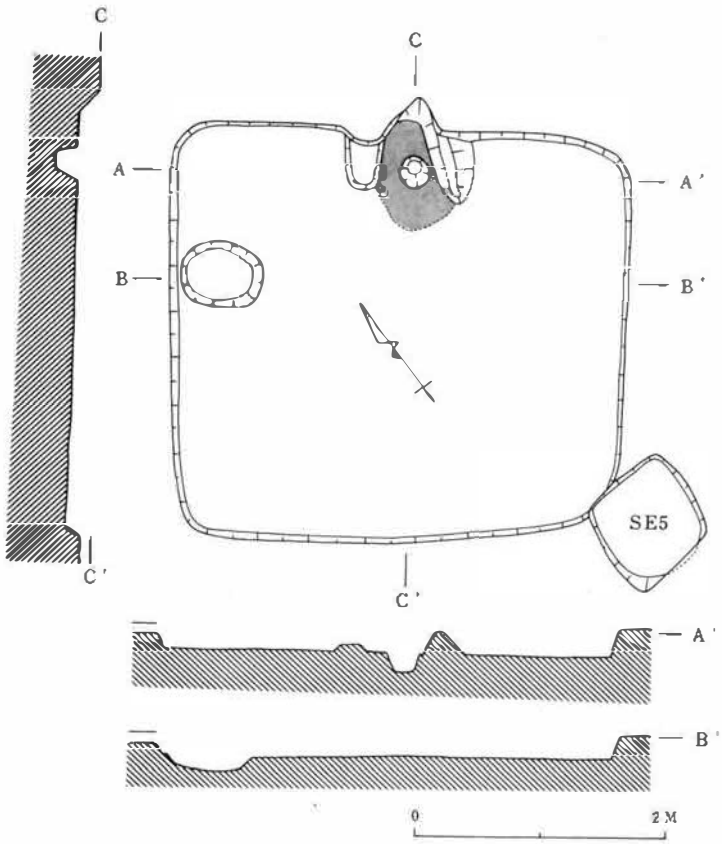


図5　1号住居址実測図

遺物（図6）　出土量は他の遺構に比べ多かったが、他の遺跡出土量より少ない。器種に土師器坏・鉢・甕がある。坏には口縁部が体部中位で内屈しながら立ち上がるもの(1)と体部が椀形で内面黒色処理されたものの2種ある。1は口縁部の内外面とも横ナデ調整が施され粗い平行条線が残る。体部から底部にかけては雑なヘラケズリのちナデ調整される。体部内面は横ハケナデが用いられ、底部はヘラ状工具によるナデのち前者ともにナデ調整される。焼成は良くない。胎土に小砂粒・石英粒を含む。口径15.8cm・器高9.0cm。鉢(2)は深鉢形で、口縁部がいく分肥厚しながら外反し、体部は直線的に収縮して底部に至る器形になるものと思われる。外面の調整は、口縁部付近が横ナデのち縦ナデ、体部が縦ヘラケズリによる。内面は口縁部に横ナデ痕を残す他はナデ調整が施される。焼成は良いが雑な整形である。胎土に小砂粒を含む。口径20.4cm。甕（3～8）は口縁部・体部形態から2種類ある。その一は口縁部が大きく外開するもので、口唇部に最大径があり、体部が筒形長胴になるもの（3～6）である。その二は体部中位に最大径があり、ずんぐりとした長胴形を呈するもの（7・8）である。3はカマド内からの出土で、口縁部と底

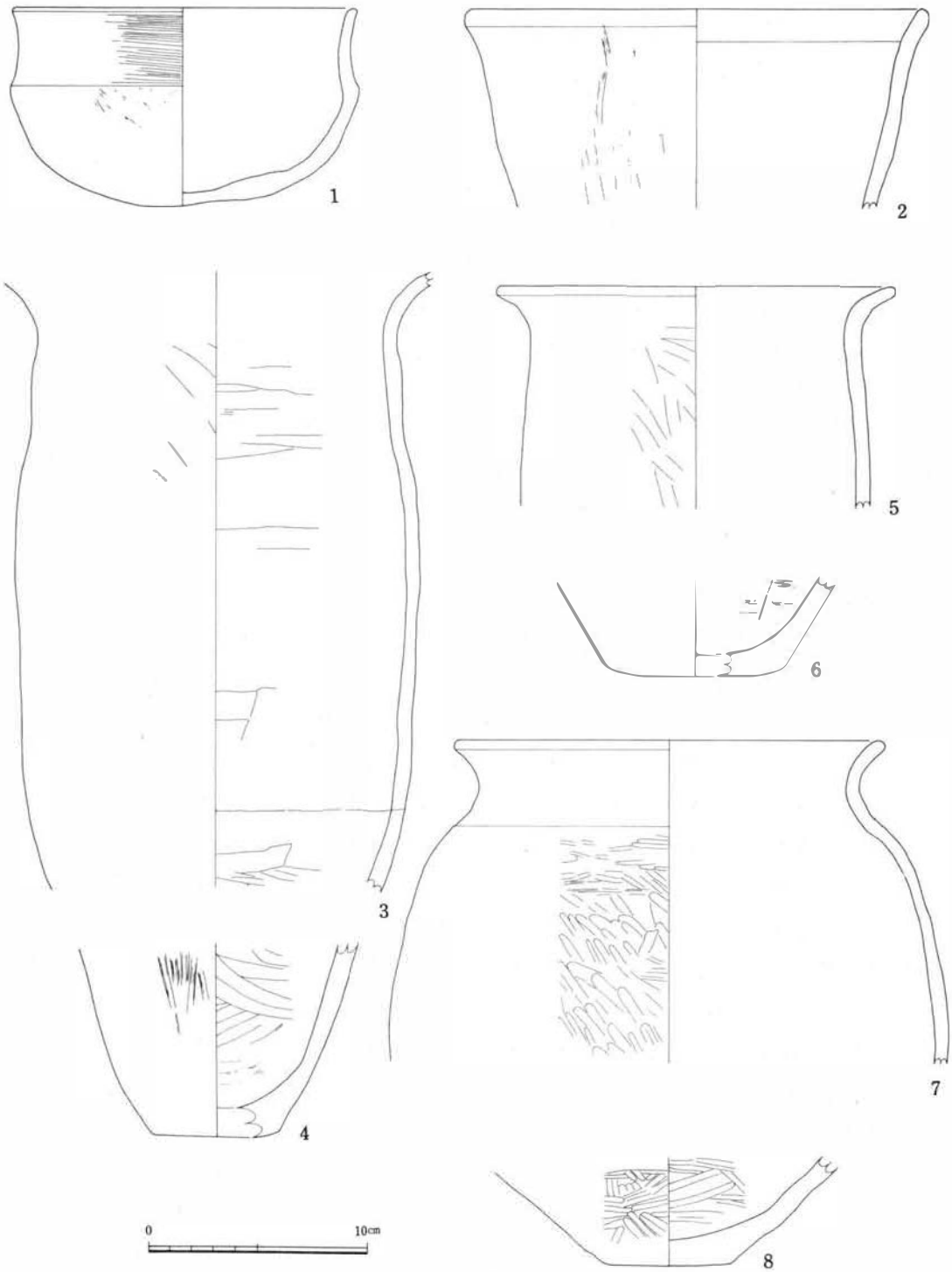


図6　1号住居址出土土器実測図

部を欠く。頸部から上方の内外面は横ナデで仕上げ、それ以下の外面は斜・縦ハケナデが施される。更に焼成後体部外面全体に水漉し粘土を粗く塗布する特色を有する。内面の上半部は、ナデと粗い横ヘラナデが見られ、底部付近は幅の狭い横ヘラナデ仕上になる。焼成は普通で、胎土に小砂粒・黄雲母を含む。4は3に接合できなかったが、整形・焼成等から同一個体と考えられる。5の外面は頸部から上方は横ナデ、下方は成形時のまだ生かわきの段階にヘラケズリ様ナデツケが下から上へ施され、肩部を作り出す。体部内面は横ヘラナデにより調整される。焼成はやや不良で、胎土に比較的大きめの石英粒を含む。口径18cm。6も整形・色調・胎土等から5の底部と推定されるが、焼成は良好である。7は、前者と比べ形態ばかりか整形も異質である。口縁部は頸部から丸味を帯びて外反し、肩部との接点に浅い段を有する。この段は頸部調整時にハケ状工具による掻き取りにより形成される。体部の外面は浅く短かく数度のヘラナデ（ミガキ）が繰りかえされる。内面はヘラ状工具による横ナデ調整である。焼成は良好で赤褐色を呈し、胎土に小砂粒及び少量の石英粒を含む。口径19.2cm。8は7と同形態の甕底部である。内外面調整はヘラナデ仕上げである。焼成は普通で赤褐色を呈す。胎土に大粒の長石粒を含む。この他、覆土中より鹿の指骨が1点出土している。これらの遺物群から鬼高Ⅲ式併行の年代を求める。

3号土坑

遺構（図15）　調査地北西に散在する土壙群の1つで、南半分を2号井戸址により破壊される。本来の形態は、卵形に近い不整長円形であったものと推定される。東西(短)軸の規模は1.13mを測り、検出面からの掘り込みは12cmである。底面は平坦で軟弱である。

遺物（図15－1）　頸部はくの字形に屈開し、口縁端部は器肉を減じながら弱く外反する。体部は球形胴になるものと思われ、肩部に丸味がある。外面の調整は、口縁部で横ナデ、体部ではハケ整形後ヘラナデによりハケ目を消している。内面は口縁部に横ナデ、体部にヘラナデが施される。若干のハケ目や成形痕を残すが、作りはていねいである。焼成は良好で、黄褐色～黒褐色を呈する。胎土は小砂粒と少量の石英粒を含む。口径17.4cm。この他、小形の壺形土器と推定される体部破片がある。外面は細いヘラ状工具でていねいに横ナデが施され、赤色塗彩される。内面調整もていねいで、横及び斜方向のカキ目がきれいに残る。黄褐色を呈し、焼成は良い。胎土に大き目の石英粒が目立つ。尚、時期は古墳時代初頭の五領期に比定されよう。

その他の遺物（図7－1～4）

遺構検出中に発見したもので、所謂包含層出土の土器である。1・2の外面は、斜方向にハケ状工具による調整が施され、深いカキ目を残す。また頸部外面と内面は、細いヘラ状工具により横ナデにより調整され、内外面ともに赤色塗彩される。焼成は良好で、胎土に少量の石英粒と長石粒が認められる。1は浅鉢形、2は小形甕形態になるものと思われる。3は坩の口縁部片で、口縁下部は丸味を帯びた段を形成する。この部位は横ナデで調整され、下方の頸部は細いハケ状工具によっておりカキ目を残す。焼成はあまり良くなく、茶褐色を呈する。胎土に少量の石英粒

・長石粒が認められる。1～3ともに古墳時代初頭に位置付けられよう。4は頸部の屈曲が弱くなり、幾分立ち上がり、口縁部が外開し、体部は球形胴に近い形態の甕である。口縁部の調整は、内外面ともに横ナデで、体部も斜方向のハケ状工具によるナデが施される。外面はきれいなカキ目を残すのに対し、内面はヘラにより消し去られる。焼成は良好で、胎土に小砂粒と若干の石英粒が含まれる。口径24.8cm。この土器は古墳時代後期の鬼高1期に比定されよう。

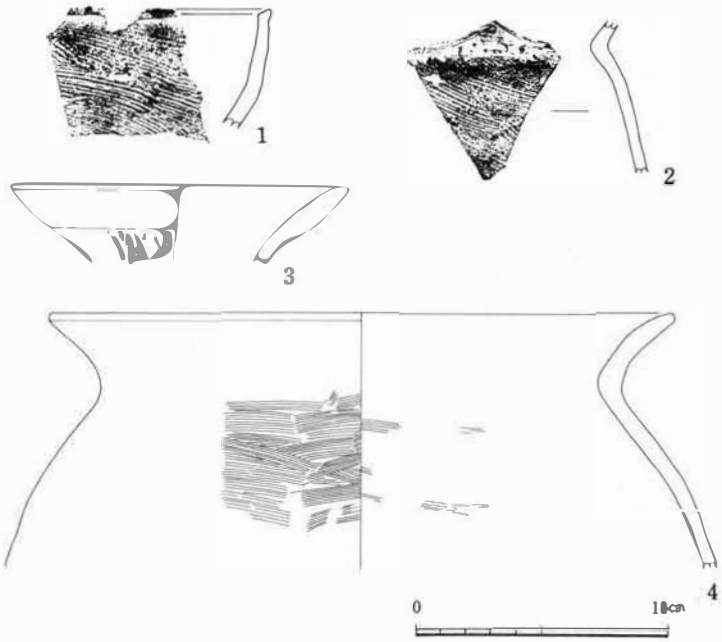


図7　遺構外出土の古墳時代土器実測図

3．平安時代の遺構と遺物

2号住居址

遺構（図8・10）　調査地北東の住居址群内にあり、3・4号住居址より新しく、3号井戸址より古い住居址である。形態は東壁が北に張り出す不整方形を呈する。北壁の方向はN19°Wになる。南北壁間3.7mで、北壁3.7m・南壁3.2mをそれぞれ測る。掘り込みは検出面から北壁18cm・南壁12cm・東壁20cm・西壁19cmの深さになる。カマドの位置・形態ともに不明であるが、南壁の西南隅に長さ50cm・巾

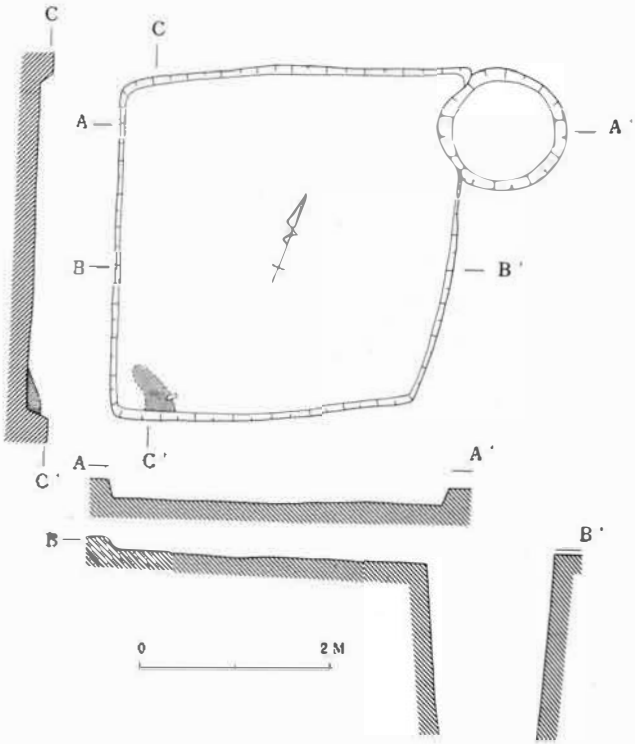


図8　2号住居址、3号井戸址実測図

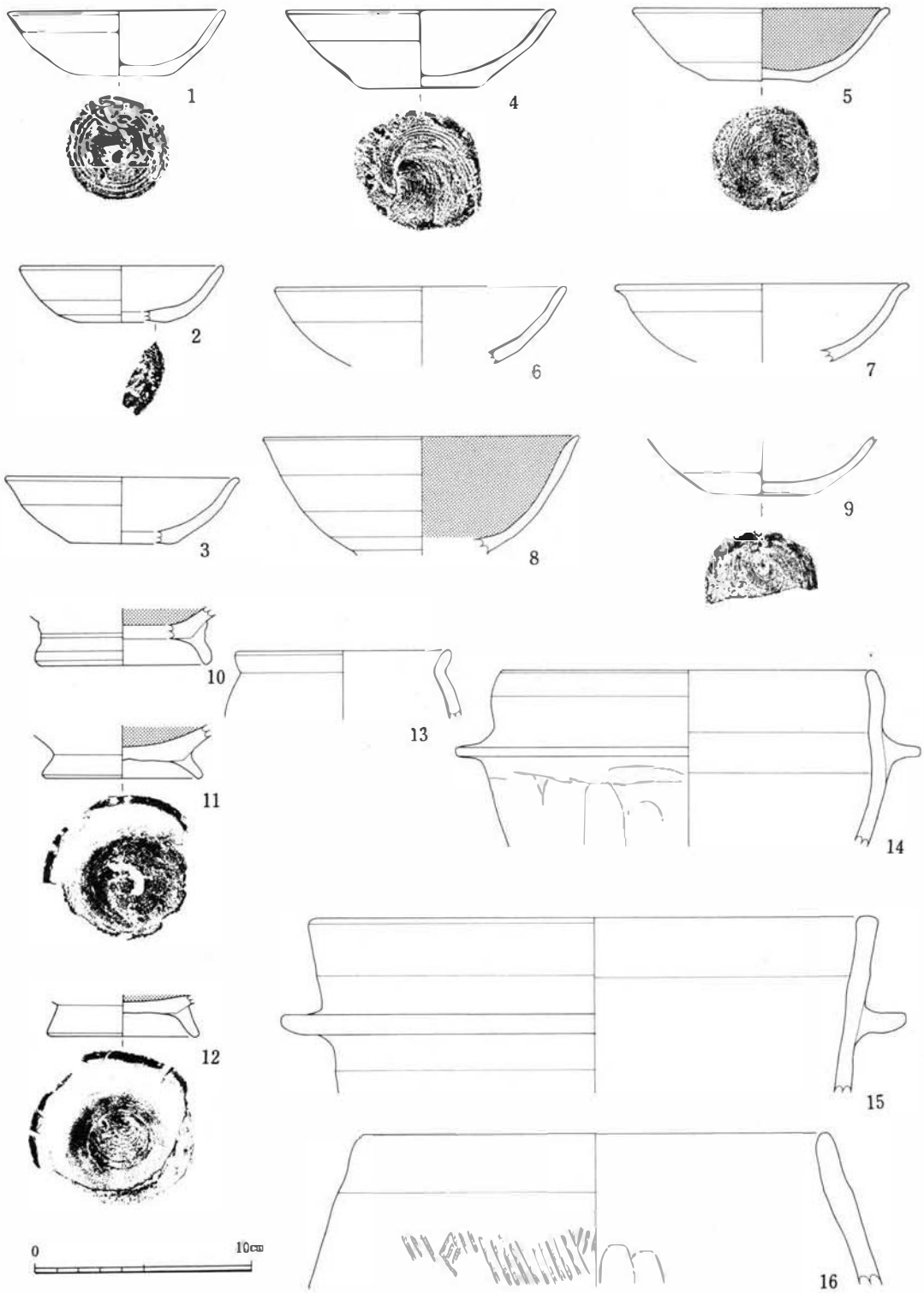


図９　２号住居址出土土器実測図

45cm・厚さ15cm程の焼土混りの黒褐色砂質土が認められたものの、火床はなかった。床面は軟弱で南に傾斜している。また後世の農作業による撹乱によるピット様掘り込みが散在しているが、この住居址に付属する柱穴はない。

遺物（図９）　これらの土器の出土状態は、床直上のものが多かったが、散在状態で検出された。坏には皿形のもの（１～３）、椀形のもの（４～９）、と高台が付されるもの（10～12）に大別することができ、更に５・８及び高台が付されるものの内面は黒色処理される。８にも高台が付されていた可能性がある。１の底部は、糸によるロクロからの切り離しののち外縁をヘラ状工具を一周させている。高台を意識したためか。ただこの器形に高台が付された例は管見していない。他は糸切離痕をそのまま残す。整形はロクロによっている。胎土を見るに、小砂・石英粒等が混入しているものの、皿形のものの方が、他のものより小砂粒が小さく砂っぽい感触を受ける。また色調も明るい赤褐色を呈する。１は口径10.1cm・底径4.6cm・器高3.1cm、２は口径9.2cm・底径4.1cm・器高2.6cm、３は口径10.8cm・底径4.8cm・器高3.1cm、４は口径12.5cm・底形5.6cm・器高3.8cm、５は口径12.1cm・底形4.8cm・器高3.4cm、６は口径13.4cm、７は口径13.6cm、８は口径14.6cm、９は底径5.2cm、10は高台径7.9cm、11は高台径7.2cm、12は高台径6.8cmをそれぞれの法量とする。13は小形の甕で、口縁部が短かく外反し、肩部が丸味を帯びる。内外面とも横ナデ調整である。焼成は良く、胎土には小砂粒・石英粒を含む。甕にはこの他図示できなかったが、体部外面は縦ヘラナデ、内面が横ナデ調整が施される大形のものが出土している。16は体部上半から口縁部まで内傾する無頸壺又は深鉢形の器形になるものと思われる。口縁部付近は内外面とも横ナデ調整が施され、外面のそれ以下は斜めのタタキ目を残し、内面はナデ調整である。焼成はやや不良で、胎土に大粒の砂粒・石英粒を含む。口径21.4cm。14・15は羽釜である。16の口縁部は内屈し端部を丸くおさめる。鍔は薄く直線的に突出するが、下方の付着調整が恵くその痕跡を残す。鍔及び口縁部及び内面は、横ナデで調整される。体部は縦のヘラナデが施される。焼成は良好で、胎土に小砂粒・石英粒を含む。口径19.4cm。15の口縁部は肥厚し、端部は面取りされ平坦である。鍔は内反りなる。内外面と横ナデ・ナデで調整される。焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。胎土に大きめの石英粒が見られる。この土器の破片として須恵器坏・蓋・甕・細口壺、灰釉陶器椀・皿等の器種がある。石製品として軽石製磨石（図17－３）が出土している。

３号住居址

遺構（図10）　調査地中央東端に位置し、東側半分は調査区外へ延び、北西部は２号住居址に切られ、北壁は意味不明な落ち込みにより破壊される。即ち壁の検出は南壁と西壁の一部だけである。西壁軸線はN20°W方向になる。規模は不明であるが、床面の確認から南北軸4.1m以上になる。検出面からの掘り込みの深さは、南壁18cm、西壁19cmと浅い。床面は平坦であるが北へ７cm程の傾斜を有する。カマドの位置等は確認できなかった。柱穴はない。西壁下より床面に接して鉄鏃が出土している。

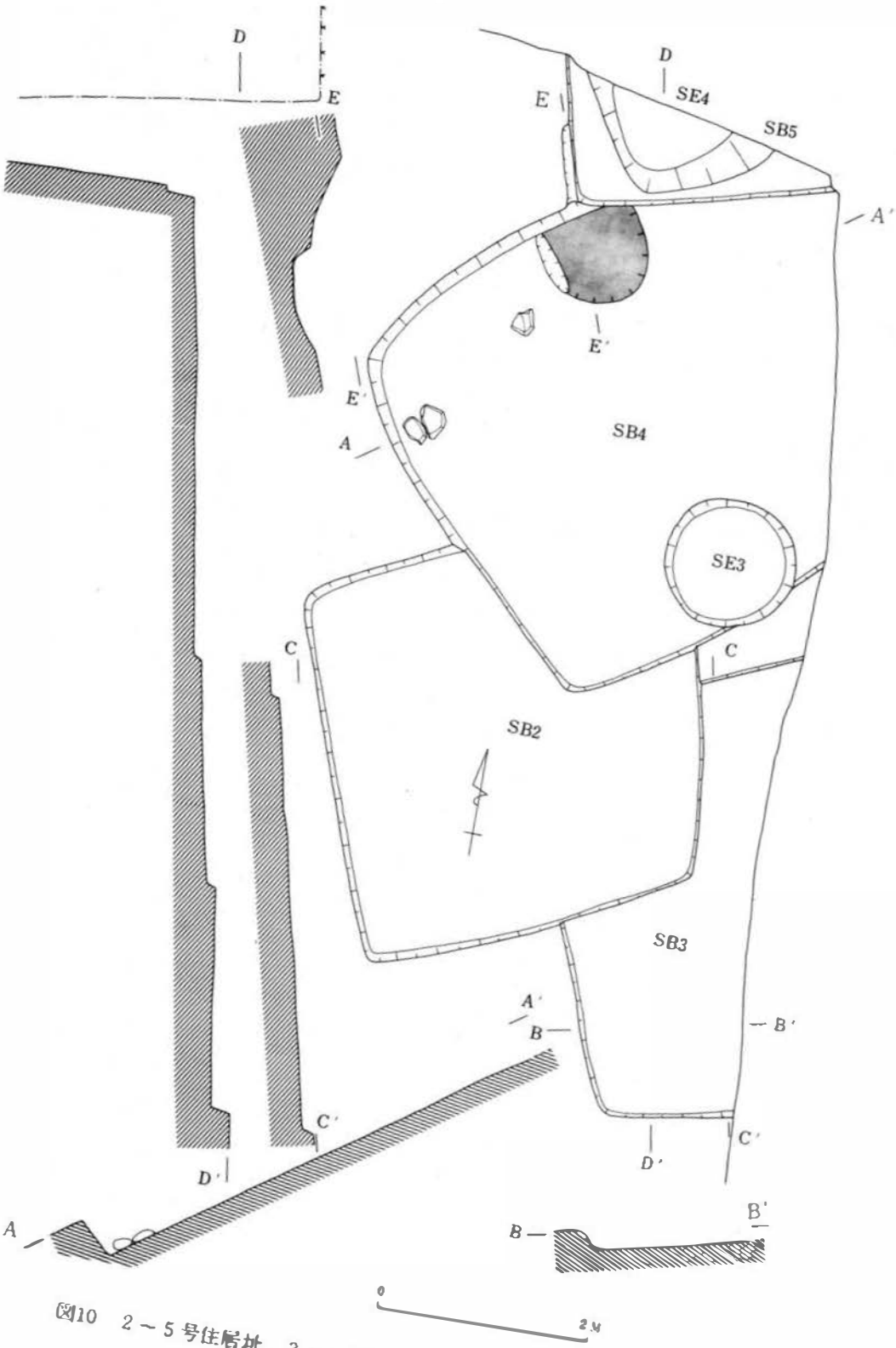


図10　2～5号住居址、3・4号井戸址実測図

遺物（図16－1・5）　土器類は、全て破片で、図上復元の可能なものはない。また出土量も少ない。器種を確認しえたものに、土師器坏・高台付坏・甕、須恵器坏・甕、灰釉陶器椀がある。この他土製品に土錘(1)がある。長さ3.2cm・最大巾1.7cmの小さなものである。鉄鏃(5)は曲刃で、基部上半部を折り返して柄着装部を作り出す。全長18.2cm・基部巾3.9cmである。

4号住居址

遺構（図10）　調査地東北隅に位置し、北壁の東半分は5号住居址に切られ、住居址の東側一部は調査対象外へ延びる。また南西隅付近も2号住居址と重複するが、掘り込みがより深かったため形態を把握することができた。南壁に3号井戸址がある。ちなみにこれら重複遺構の中では最も古い遺構である。形態は、主軸方向をN38°Wをとり、各壁とも丸味を帯びた隅丸方形を呈する。主軸規模は4.25mを測る。掘り込みは、検出面から北壁で34cm・西壁で39cmを測り、南壁は2号住居址床面より6cm深い。カマドは北壁中央付近に構築されるが、既に破壊されており、火床・煙道及びカマド構築材の抜き取り痕と思われる落ち込みを確認したにすぎない。火床は主軸長87cm・巾50cm程のもので、中央部で14cm凹む。煙道は主軸線に対し東に振って延び、長さ75cm・巾20cm程のものと推定され、22cmの比高差をもって住居址内に落ち込む。火床左手の落ち込みの規模は、長さ60cm・巾13cm・深さ5cmを計測する。床面は平坦で軟弱である。柱穴はない。

遺物（図11）　出土土器は、全て破片であって、完形復元できるものはない。1・2は台坏皿形土器で、同一個体である。内外面とも良く研磨され黒色処理される。口径12.0cm・高台径5.8cm。3～7は土師器坏で、3・5～7の内面は黒色処理が施される。8にはハの字形の高台が付される。6・7の外面には顕著なロクロ整形痕が目立つ。これらの坏の焼成は良好で、黄褐色から茶褐色を呈す。また共に胎土中に石英粒を含む。3は口径10.4cm・器高3.1cm・底径4.4cm、4は口径12.0cm、5は口径12.4cm・器高4.7cm・底径5.5cm、6は口径14.2cm、7は口径17.6cm、8は高台径7.2cmをそれぞれ測る。9は須恵器蓋で、天井部以降を欠損する小破片を図上復元した。ロクロ整形痕が顕著である。10～16は須恵器坏で、16には高台が付される。青灰色から暗青灰色を呈し、13・16を除いて焼成は良い。13・16は白灰色で焼成は良くない。胎土に小砂粒を多く含み、ざらつく感を受け、調整も雑である。10は口径13.0cm・底径5.9cm・器高4.1cm、11は11.8cm・底径6.6cm・器高3.2cm、12は口径12.1cm、13は口径15.0cm、14は口径12.4cm・底径5.4cm・器高3.2cm、15は口径12.3cm・底径5.5cm・器高3.2cm、16は口径9.4cm・高台径6.1cm・器高3.8cmをそれぞれ計測する。尚、図示することができなかったが、この器種の体部破片中の一片に縦一の墨書がある。17は須恵器瓶で、外面全体に黒緑色の自然釉がかかる。頸部欠損後、破損部を打ち欠き再調整している。胎土に大きめの砂粒を含むが作りはていねいである。18は土師器甕である。体部外面は成形時の粘土帯(紐)の痕跡を残し凹凸が著しい。体部外面の上半から口縁部は、ロクロ整形であるにたいし、下半はヘラケズリが施される。内面は横ナデで調整される。赤褐色を呈し、焼成は良い。胎土に小砂粒を含む。口径19.8cm。

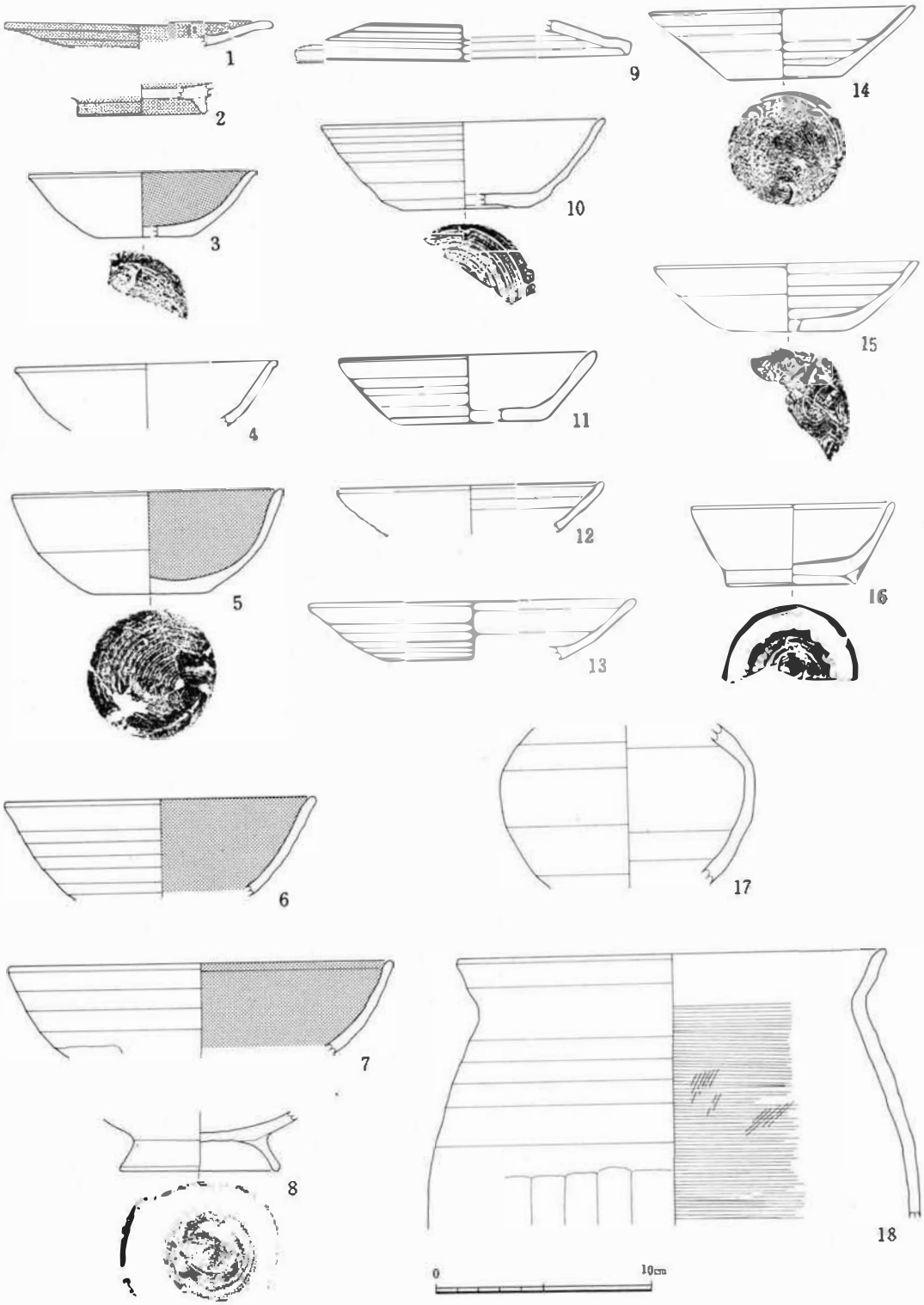


図11　4号住居址出土土器実測図

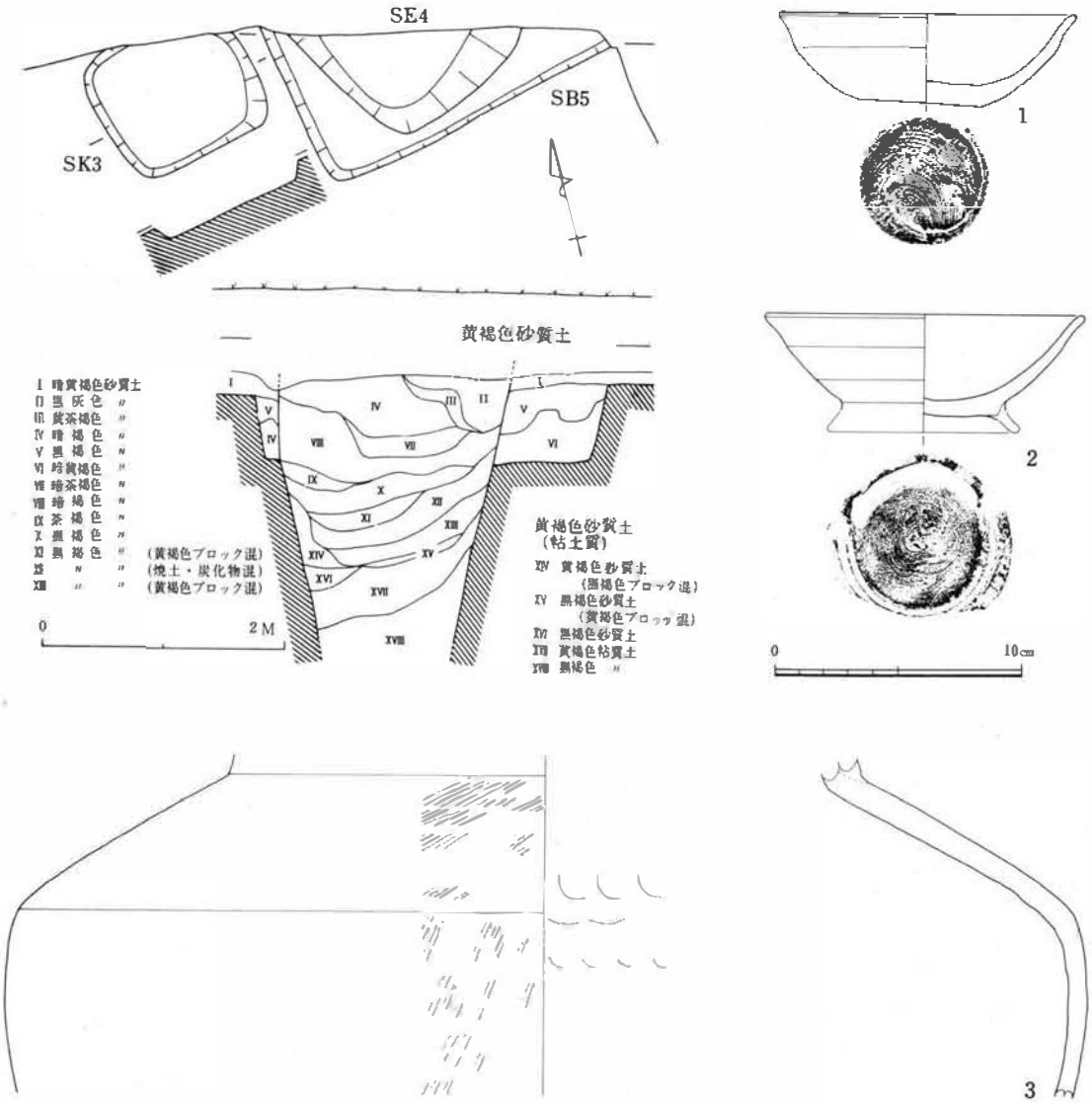


図12　5号住居址：4号井戸址・1号土坑実測図、5号住居址出土土器実測図

5号住居址

遺構（図10・12）調査地北東隅に位置するため、住居址の南西隅の一部を検出したにすぎない。また検出床面積大部分が4号井戸址により破壊を受けているため詳細は不明の点が多い。形態は方形になるものと思れる。西壁の方向はN 8°Wである。掘り込みは深く、南壁50cm・西壁54cmを測る。床面は平担で軟弱である。

遺物（図12－1～3）　出土量は少ない。1は土師器坏で、2は高台付坏である。とくに黄褐色を呈し、焼成は良く、ロクロ整形も比較的ていねいである。胎土に大きめの砂粒を含む。2の

底部外縁は高台の接着を良くするため２条の凹線がめぐる。１は口径11.8cm・底径5.1cm・器高3.6cm、２は口径12.6cm・高台径7.6cm・器高4.8cmをそれぞれ測る。３は須恵器甕である。肩部が平担で体部との接点で張る。肩部外面は左下りのタタキ目が残り、自然釉がかかる。体部もタタキ調整されるが後に横ナデにより消去される。内面の接点部に２段の指おさえ調整痕が残るが、全体にナデ調整により仕上げる。焼成は良好で、外面茶褐色・内面黒灰色の色調を呈する。胎土に大粒の砂粒が混入している。このほか石器として敲打器（図17－２）がある。安山岩製で両先端部付近に浅い打痕が残る。

１号土坑

遺構（図12）　調査地北端に位置し、北東隅付近は調査区外にある。形態は隅丸方形を呈し、南北11.5m・1.2m・深さ14cmの規模である。底面は平担である。

遺物　出土土器は土師器坏体部片が一点だけである。

２号土坑

遺構（図15）　調査地西側に散在する遺構群の１つである。長軸をほぼ南北にとる不整長方形態であり、その規模は南北軸1.5m・東西軸1.3m・深さ85cmを測る。底面は平担である。

遺物　出土量は少なく、図示できる破片もない。破片から土師器坏・甕、須恵器甕と推測する。

４号土坑

遺構（図14）　調査地内の最も西にある。規模及び形態は、直径65cm程の不整円形を呈する。深さは11cmで、平担な底面である。底面に接して自然石が１個検出される。

遺物　覆土より土師器甕体部片を得ただけで、図示できるものはない。

その他の遺物（図13）

遺構出土のものと同様、全て破片状態で、図上復元できるものは２点にすぎない。器種の中で最も多く目につくのは、土師器坏・甕の類で、次いで須恵器の同種及び蓋で、灰釉陶器は３点にすぎない。１は内面黒色処理された高台付坏である。内面は良く研磨され、放射状暗文が施される。底部外面は回転ヘラケズリ調査である。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。高台径7.6cm。2は小形の甕である。内外面ともロクロ調整である。焼成は良く、赤褐色を呈する。胎土に小砂粒・大きめの石英粒を含む。口径13.9cm。

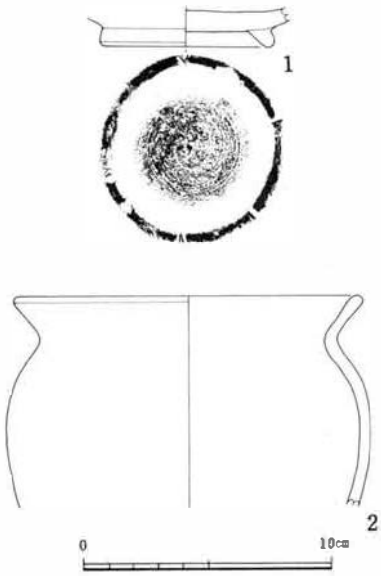


図13　遺構外出土の平安時代の土器実測図

4．平安時代以降の遺構と遺物

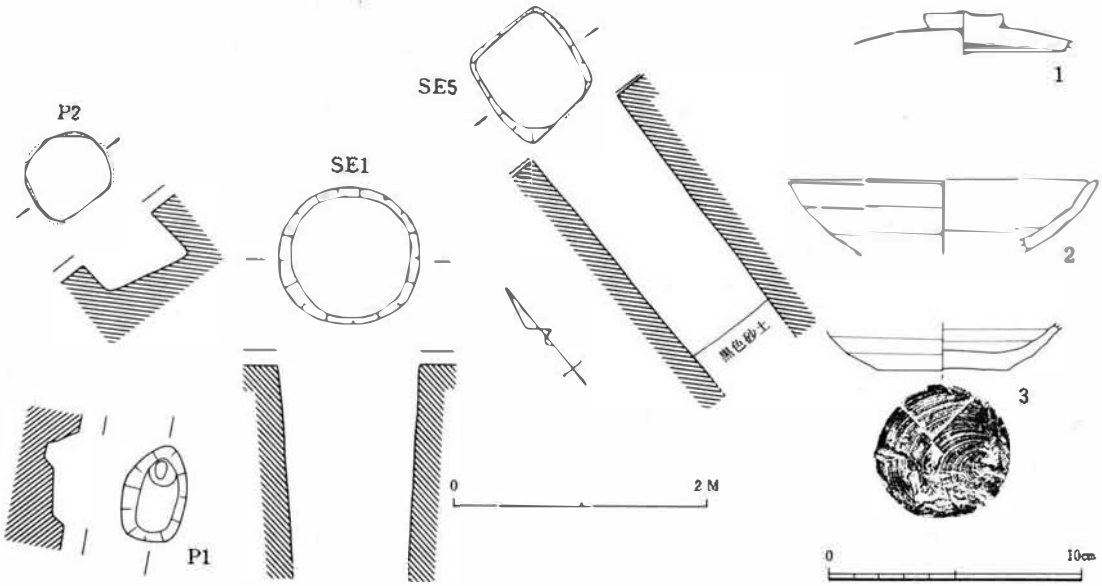


図14　1・5号井戸址、ピット1・2実測図、1号井戸址(1)
・5号井戸址（2・3）出土土器実測図

ここで記載する遺構と遺物は、明らかに中世と認定されるもののほか、中世に属する遺物が出土しないが、遺構の重複関係、類似性格遺構から中世へとの含みをもたせ平安時代以降と表現した。また時期が判明しないものもここに含めた。

1号井戸址

遺構（図14）　1号住居址東側に位置する。直径1.1mの素掘りの井戸址で、実測図よりも感覚的には直に近い掘り込みである。検出面より1.5mを調査し、それ以下は5号井戸址の例と同じと判断し調査を打ち切った。

遺物（図14－1）　土器類は、全て破片出土で、図示できるものは須恵器蓋1点にすぎない。破片から類推すると須恵器坏、土師器坏・甕、灰釉陶器細口壺・高台付椀、内耳土器等の器種がある。この他土錘（図16－2）、安山岩製の凹石（図17－5・7）及び大型獣骨が出土している。

2号井戸址

遺構（図15）　調査地の北側に位置し、3号土坑を切って掘り込まれる。形態は不整円形を呈し、径90cm程の規模になる。深さ80cmまで検出した。

遺物　検出作業中の出土遺物はなかった。ただこの遺構を3号土坑の範囲と考え調査したため、覆土遺物中に中世に比定されるカワラケ片が混入していた。この本井戸址に属するものと考えられる。

3号井戸址

遺構（図8・10）　調査地の北東隅付近の住居址群内にあり、中でも最も新しい遺構である。形態は正円形に近く、掘り込みは直である。径1.3mの規模で、深さ1.6mまで確認した。

遺物　出土量は少なく、図示できるものはない。破片から土師器坏・甕、須恵器坏の器種を推定する。

4号井戸址

遺構（図12）　調査地北東隅に位置し、5号住居地の床面を掘り抜いている。北側半分程調査区域外にあり全形を知り得ないが、隅丸方形を呈するものと思われる。掘り込みは他の井戸址と異なり擂鉢状になる。深さ1.6mまで確認した。掘り込み面は5号住居址より1層上の暗黄褐色砂質土と推定されるが、黄褐色砂質土層からとも考えられる。検出底面まで、18層の土層が確認され、下層ほど左傾斜で堆積してい、上方では平行堆積状態になる。この埋没は、序々に自然堆積したものによると考えられる。

遺物　出土遺物は土師器甕体部片1点にすぎない。

5号井戸址

遺構（図14）　1号住居址の南東隅を掘り込む。上面形態は、南北80cm・東西85cmの方形を呈するが、下方にいくほど円味を増し、南側で袋

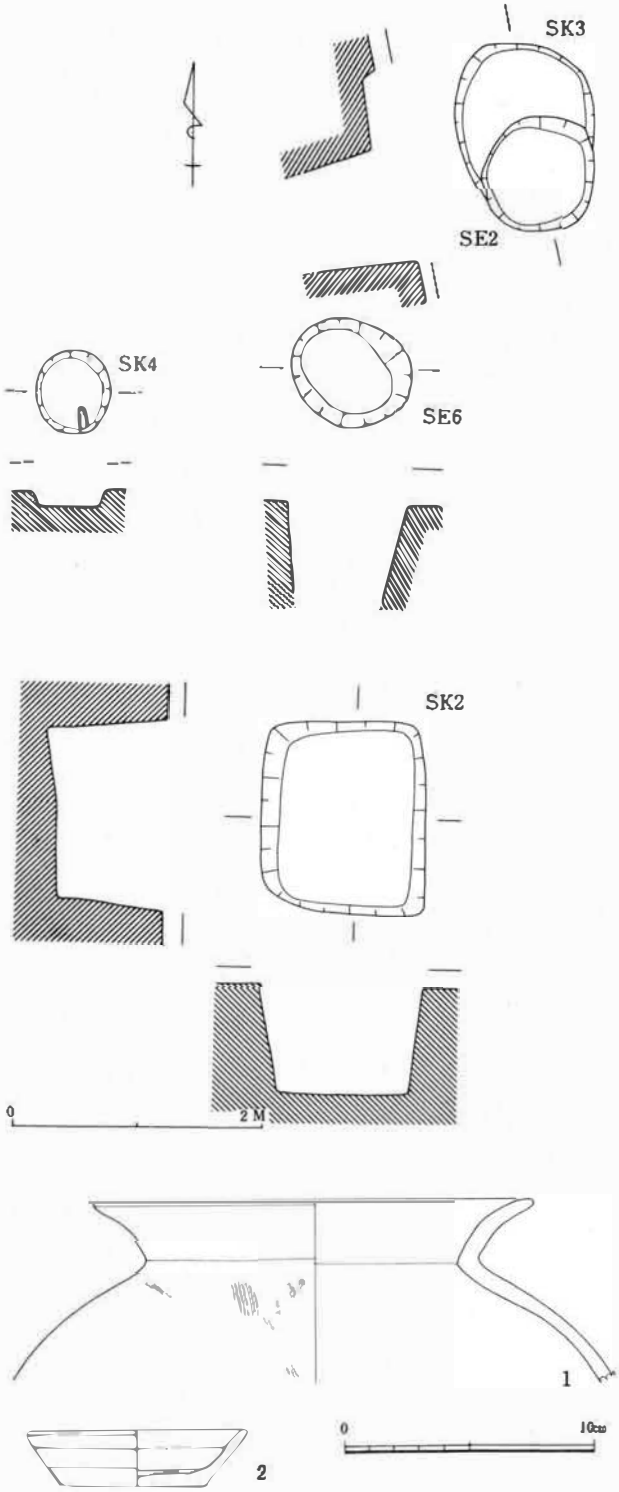


図15　2・4号井戸址、2～4号土坑実測図
3号土坑(1)・6号井戸址(2)出土土器実測図

状になる．深さ200cmまで掘り進んだところそれ以下は、黒砂質土になり、水気を含みべたつくようになる。底面に近づいたことをうかがわせる。ただ底面まで確認したかったのであるが、壁の崩壊等の危険性がでてきたので、これ以上の調査を断念した。

遺物（図14－2・3）　ともに須恵器坏であるが、1は胎土に小砂粒を多く含み器面がざらつき、黒灰色を呈するのに対し、2は良選された胎土で、白灰色を呈するつくりの良い土器である1は口径12.1cm、2は底径5.2を測る。同器種で底部がヘラ切離痕を残すもの、体部に墨書があるものがある。この他破片から須恵器甕・蓋、土師器坏・甕等の器種がある。

6号井戸址

遺構（図15）　2号井戸址の南西に位置する。東西軸1.0m・南北軸0.85mの規模を有する不整長円形態の遺構である。深さ75cmまで確認する。

遺物（図15・17）　15図の2は中世のカワラケである。胎土は良選され、黄白色を呈する口径8.8cm底径5.6cm器高2.3cmを測る。この他の土器類に土師器甕、灰釉陶器椀の破片が出土している。石製品に火山弾製（図17－6）と軽石製（同4）の凹石（石臼）がある。

ピット1・2

遺構（図14）　調査地南端近くに位置するもので、1は北西から南東にかけ長軸のある不整楕円形を呈する。主軸0.8m・短軸0.5m・深さ9cmを測り、主軸北よりに直径20cm・深さ6cmの柱痕状ピットを有する。2は1より2.5m程の距離がある。南北0.68m・東西0.6m・北側深さ14cmを測る袋状の不整円形の遺構である。

遺物　ピット2から土師器・須恵器の坏片各1点が出土しているにすぎない。

攪乱地（図4）

調査地南西部に見られた落ち込みで、東西（北壁）2.7mと南北（東壁）3.0mが直交するため、当初住居址として調査を進めたのであるが、黒褐色が広がっており、また土層観測用のベルトを残し床面部を追求したところ

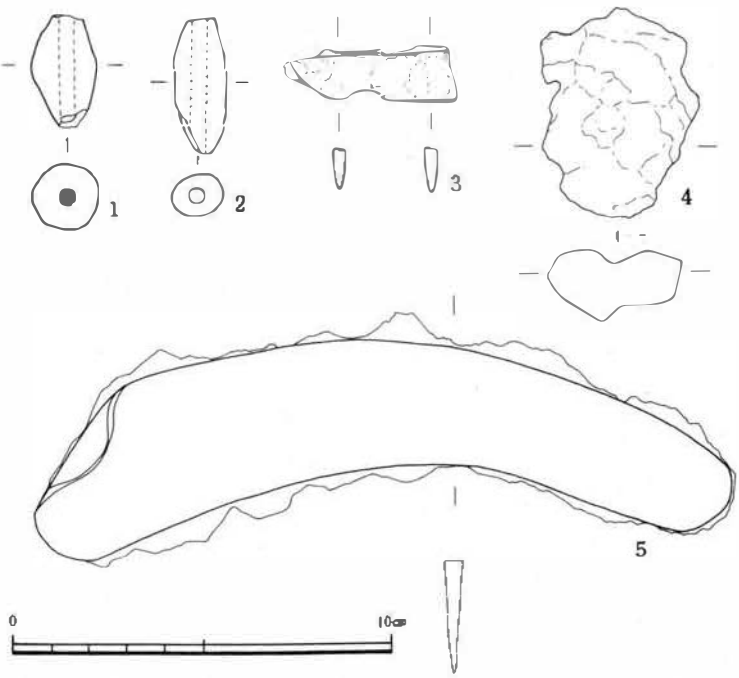
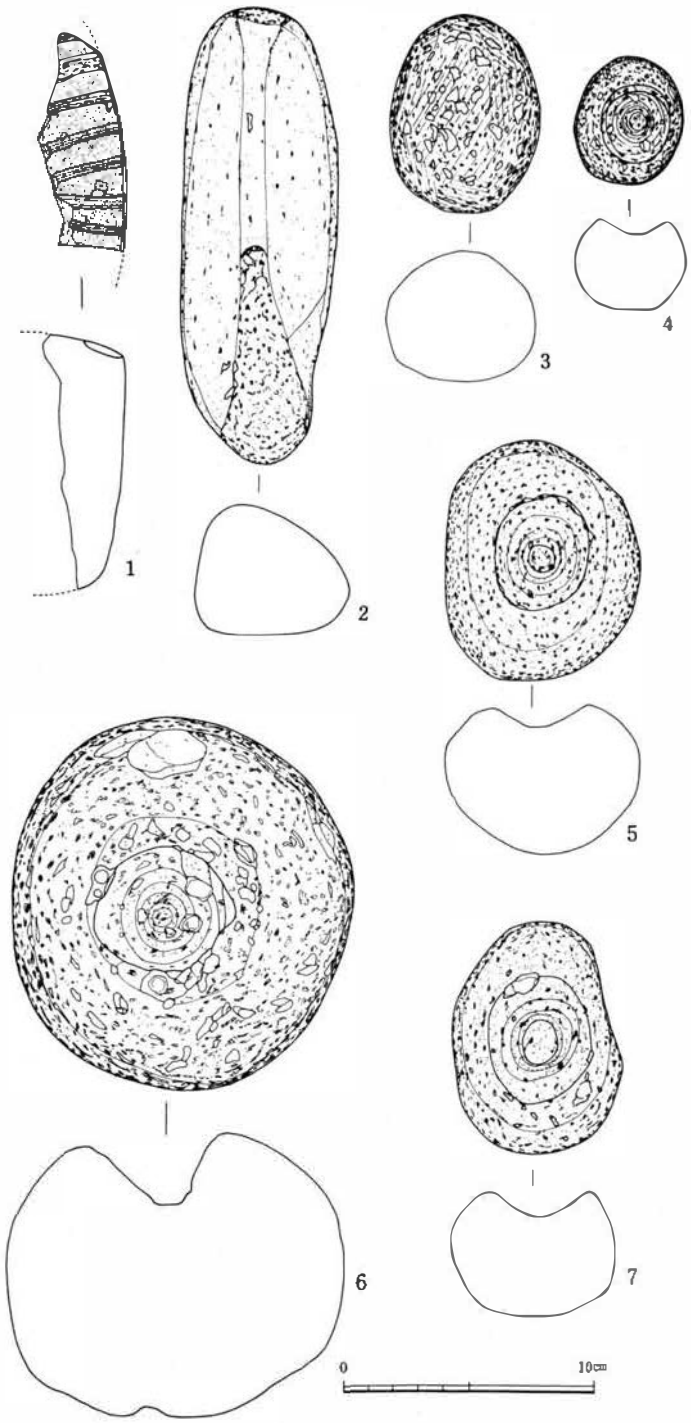


図16　3号住居址（1・5）・1号井戸址（3・4）
出土の土製品・鉄製品実測図

凹凸不規則なものであった。結局後世の畑作等による撹乱によるものであろうと結論づけた。遺物に弥生時代後期の壺・甕平安時代の土師器坏・甕、同須恵器坏、中世の内耳土器・カワラケの小破片がある。

その他の遺物

暗オリーブ系の青磁陶器が2点出土している他近世陶器が4点ある。この他溝切りの石臼片（図17－1）が出土している。



1.石臼・安山岩・包含層
2.敲打器・安山岩・SB5
3.磨石・軽石・SB2
4.凹石軽石・SE6
5.凹石安山岩・SE1
6.凹石火山弾・SE6
7.凹石・火山弾・SE1

図17　遺構及び遺構外出土石器実測図

第4章　まとめ

調査地は横田遺跡群内のごく限られた狭い範囲内であったが、この地域では初めての学術調査で、遺跡の性格を知る上で先鞭をつけたことは評価できよう。更級横田神社には社宝として縄文時代から平安時代にかけての遺物が収められている。一部松代地区のものも混入しているようであるが、そのほとんどは横田地域内の採集品と見てよかろう。残念なことに観音寺遺跡の子持勾玉を除き他は、出土場所が不明である。それ故に塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群と続く千曲川右岸の自然堤防上に展開する一連の遺跡群と考えていた。この推測の大筋においては間違いないところであるが、一部に変更を余儀なくさせた。それは千曲川に面する南端部に意外と遺構が粗い分布を示していたことと、その時期にかたよりを見せていたことである。塩崎遺跡群のように万遍無く各時期の遺構が密集して分布するのでなく、それよりも密度が薄く展開するようである。

弥生時代のものは自然堤防南縁より奥まった位置にあるのではないかとも思われる。さらに推定すると弥生時代の集落は生産地との関係から他の遺跡群より小規模のものであった可能性がある。

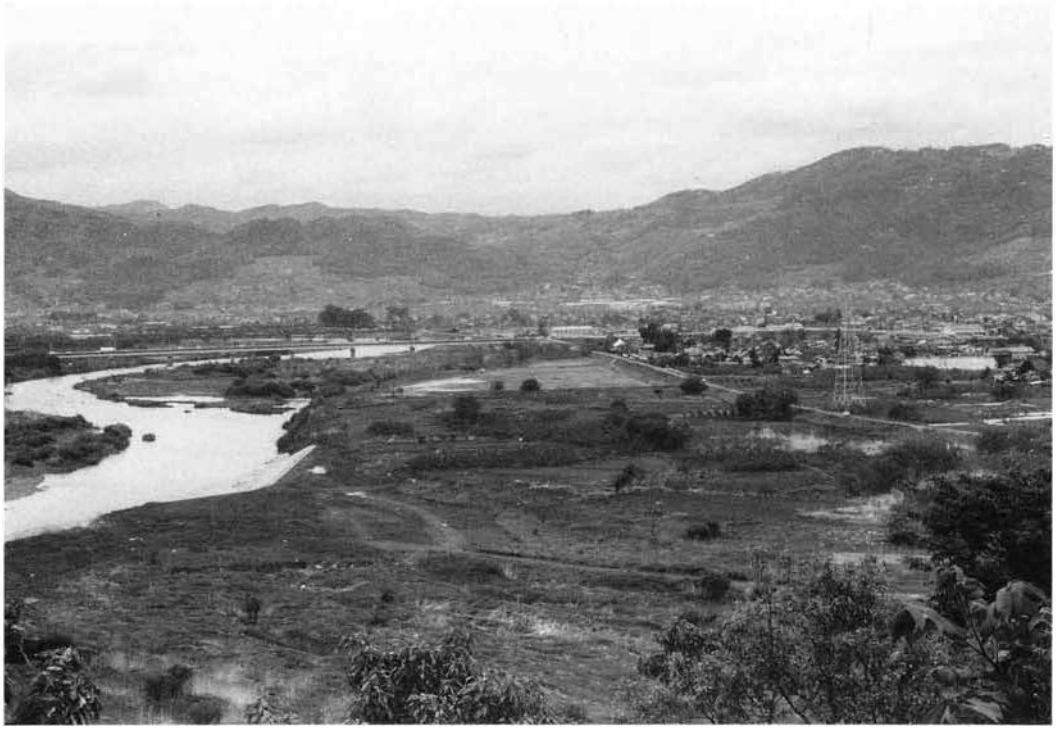
古墳時代に入ると初頭から人為的所作が認められ、土口将軍塚古墳との関連から大きく展開していくものと思われる。ただ今回の調査では、この古墳とのかかわりを根拠とする資料はなかったが、赤色塗彩された土器の存在及び時期はやや遅れるが子持勾玉の出土等から、前・中期にかけこの周辺は何らかの祭祀に関与した地域であった可能性がある。また今回検出した該期の住居址は、1軒だけで、それも後出の鬼高Ⅲ式期に比定される。この住居址は、小形で柱穴がないという特異なものである。住居であろうが、集落内でのあり方を検討する必要がある。

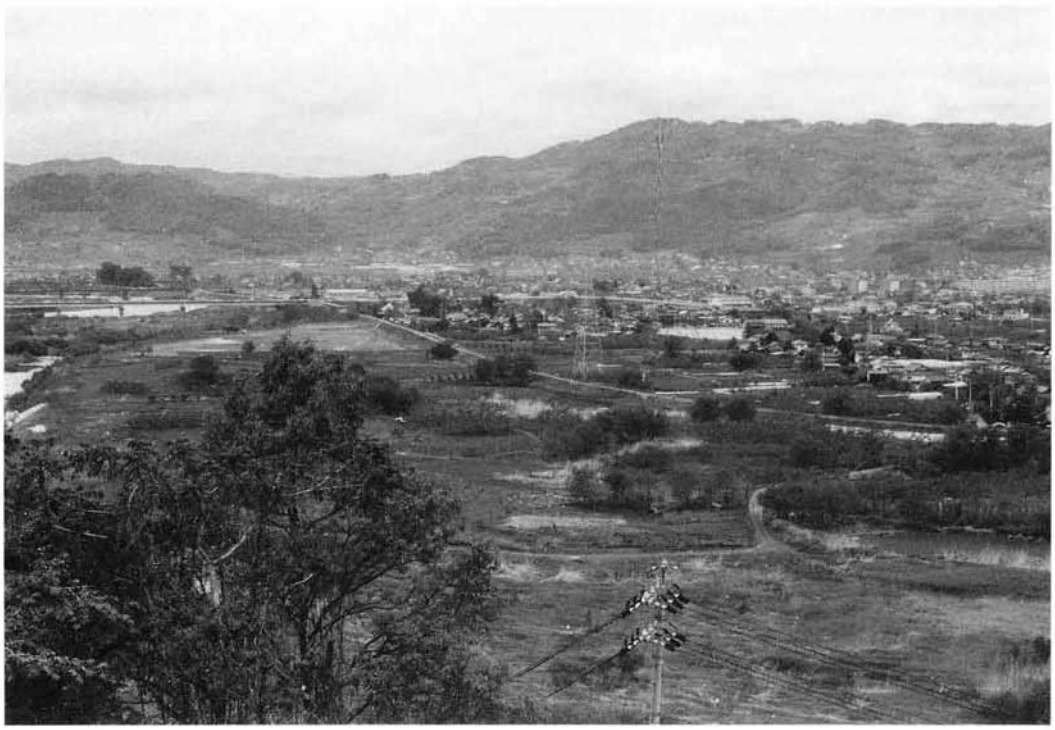
平安時代に至ると他の遺跡群と同様爆発的展開を示し、住居地は重複関係にあるものが多くなる。後背の川中島扇状地の開発が進んだことが裏付けられる。

井戸址が意外と多い。単に掘り込みが深く湧水を見たのでこの名称を付した。直に近い掘り込みで井戸枠等の遺構はない。自然堤防上の調査では必ずといって良い程検出される遺構で、内側部の塩崎遺跡群松節・小田井神社地点遺跡で7基以上、塩崎小学校地点遺跡で4基、端部の水辺に近い所の聖川大規模自転車道地点遺跡では8基にも及ぶ数が確認されている。時期は平安時代以降に限られ、中世のものが多い。今回の調査では全て自然埋没によるもので、同時期使用が考えられる。この井戸址は中世事情の何かの人口増等に伴うものと考えられる。これに伴い青磁片の存在も忘れてはならないように思う。

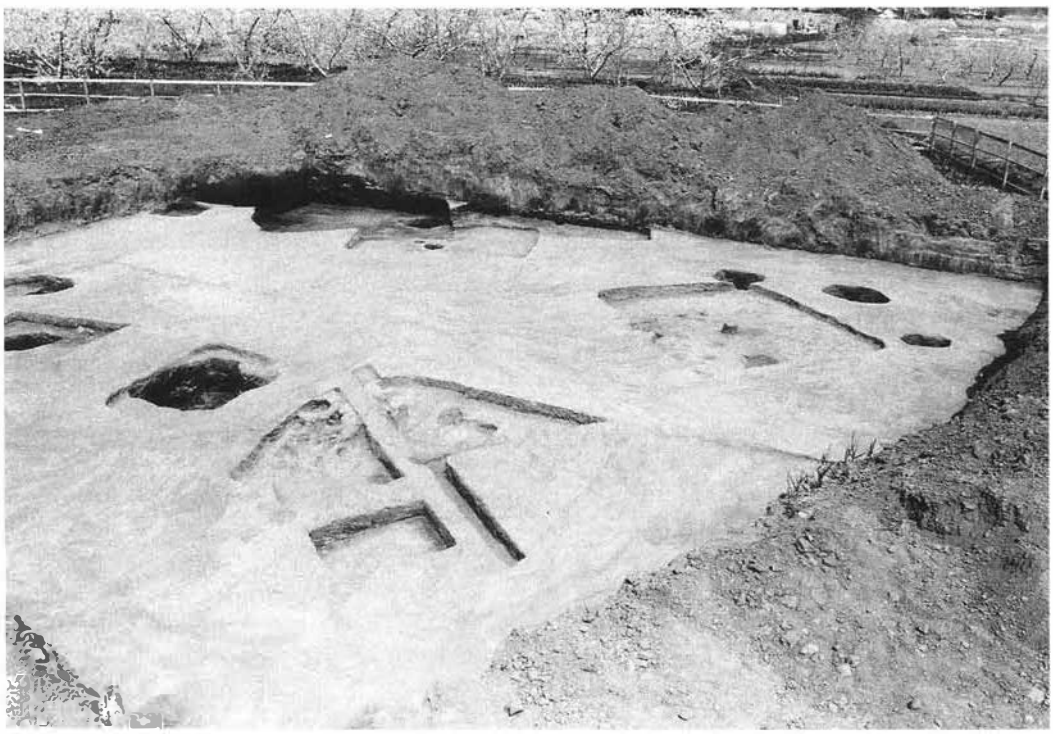
以上のように遺跡群の一端を垣間みただけで、まだまだ解明しなければならない問題が数多く横たわっている。今後の調査に期待する。

図版一　調査地遠景

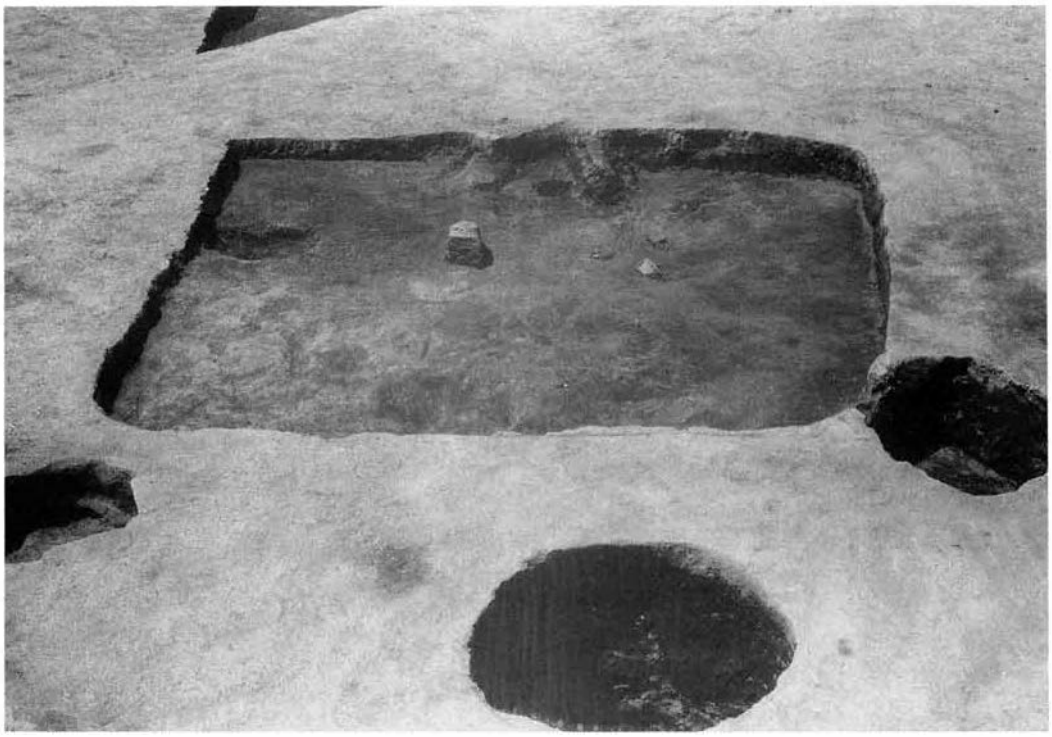


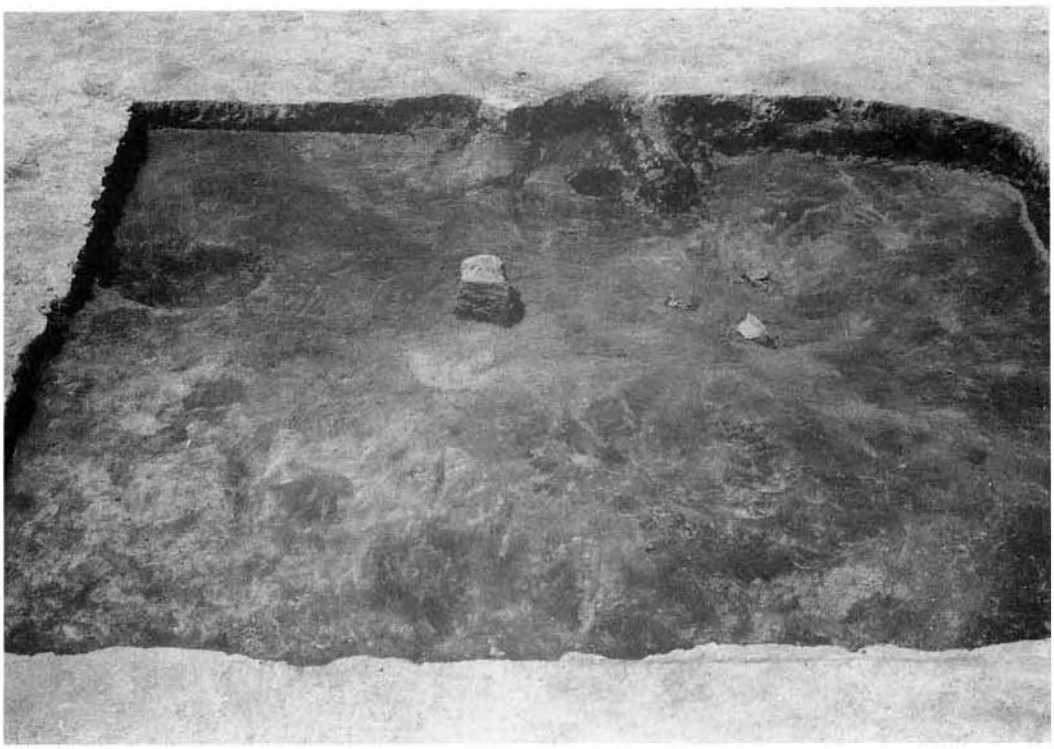


図版二　調査地近景・遺構分布状態

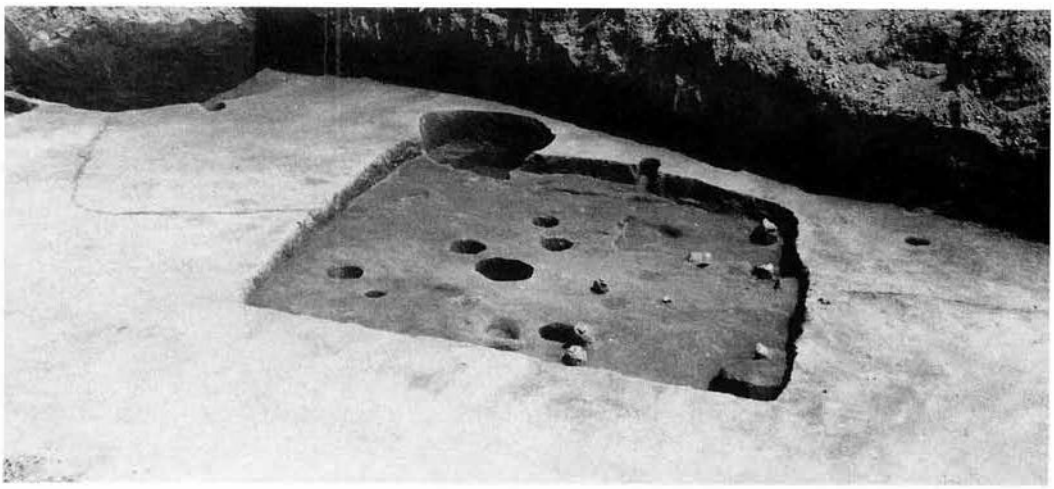


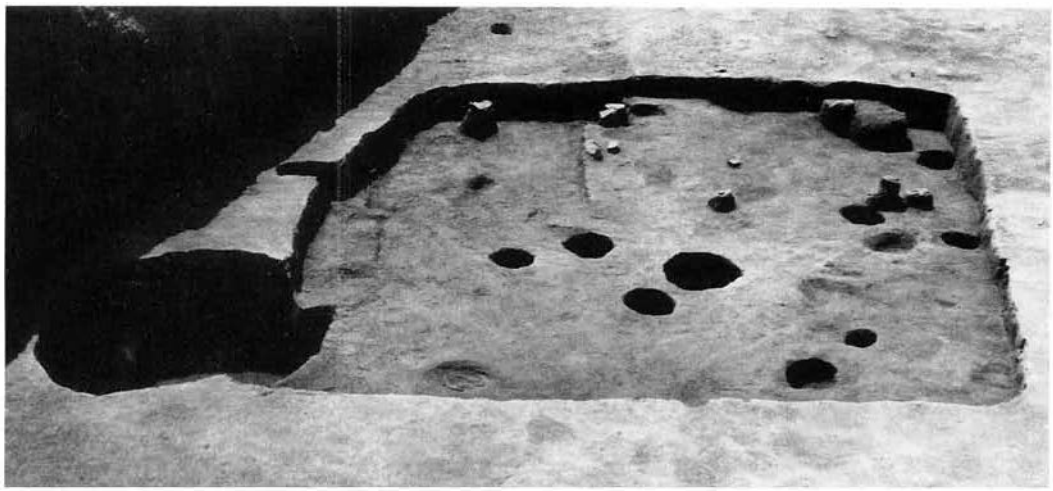
図版三　一号住居址・五号井戸址・一号井戸址

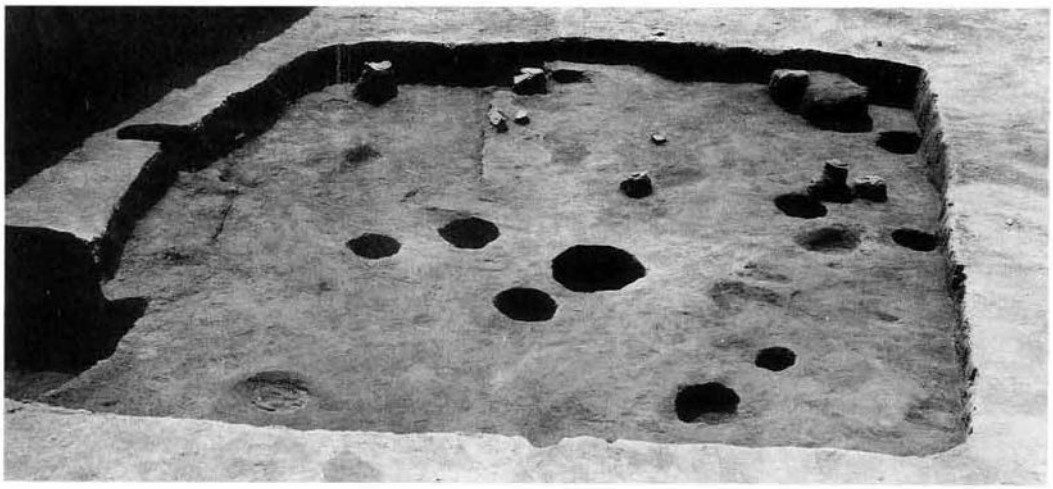




図版四　二号住居址・三号井戸址

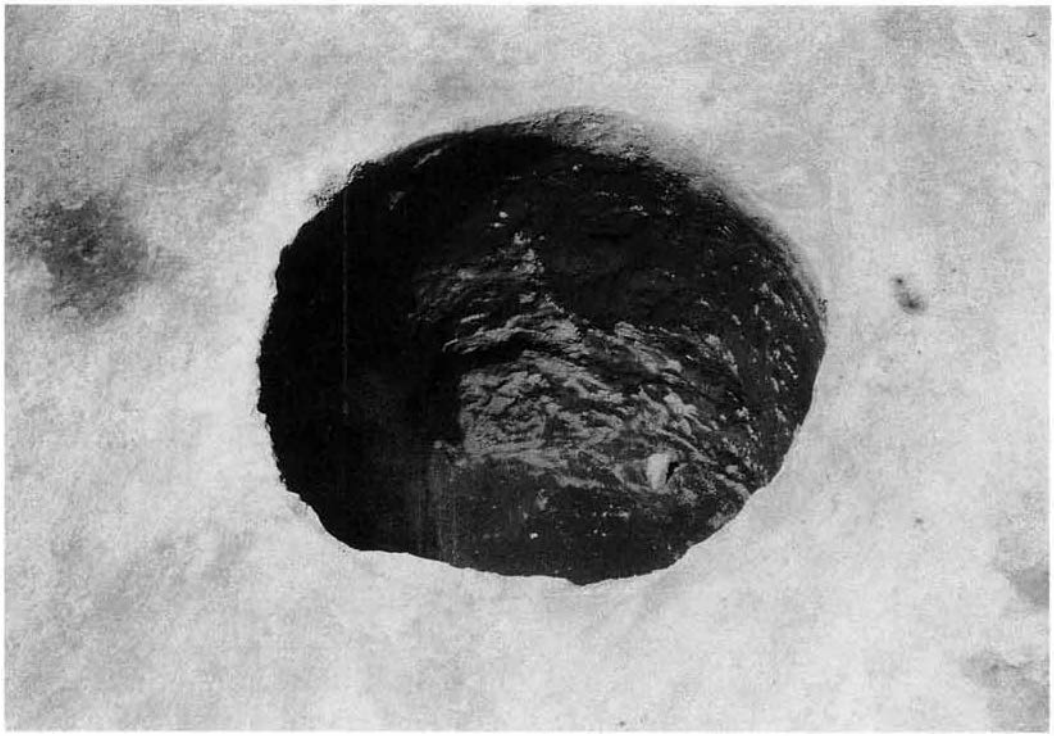






図版五　二～五号住居址・一号土坑・四号井戸址

図版六　三号井戸址・一号井戸址



図版七　調査スナップ

図版八　調査スナップ

長野市の埋蔵文化財　第1集『信濃長原古墳群』
〃　第2集『浅川西条』
〃　第3集『中村遺跡』
〃　第4集『塩崎遺跡群』
〃　第5集『塩崎遺跡群(2)』
〃　第6集『三輪遺跡群水内坐一元神社遺跡』
〃　第7集『田中沖遺跡』
〃　第8集『篠ノ井遺跡群』
〃　第9集『四ツ屋遺跡（第1～3次）』
『篠間遺跡』
『塩崎遺跡群(3)』
〃　第10集『鶴谷古墳群』
『長礼山古墳群』
『駒沢新町遺跡』
〃　第11集『箱清水遺跡』
『大峰遺跡』
『大清水遺跡』
〃　第12集『浅川扇状地遺跡群』
—長礼バイパスA・E地点遺跡—』
〃　第13集『浅川扇状地遺跡群篠ノ井遺跡』
『川田条里的遺構』
『石川条里的遺構』
〃　第14集『石川条里的遺構(2)』
『上駒沢遺跡』
〃　第15集『箱清水遺跡(2)』
〃　第16集『石川条里的遺構(3)』
（付上駒沢遺跡）
〃　第17集『浅川扇状地遺跡群』
—長礼バイパスB・C・D地点遺跡—』
〃　第18集『塩崎遺跡群V
—市道松節—小田切押入地点遺跡—』
〃　第19集『生仁将軍塚古墳
—厚生遺跡確認緊急調査—』
〃　第20集『三輪遺跡(2)』
〃　第21集『岩田小学校遺跡』
〃　第22集『吉田高校グランド遺跡』

長野市の埋蔵文化財　第23集

横田遺跡群 富士宮遺跡

—鉄塔移設に伴う緊急発掘調査—

昭和62年9月30日 印刷
昭和62年9月30日 発行

編集・発行　長野市教育委員会
中部電力株式会社長野支店

印刷　第一印刷株式会社
長野市県町528
TEL 0262(84)2525(代)